

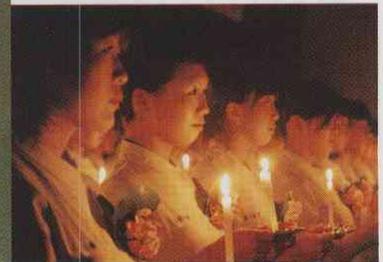


ポルティコの広場



臨地実習の 幕開け

第1回 継燈式



本学の臨地教育について

・学生部長 加藤光寛

領域別実習に1期生(第2学年)が臨み、実習を無事に終えたことを皆様にお伝えしようと思っております。

1. 本学の臨地実習教育の特色

本学の教育の特色は、早期から専門科目を学び、実習の入り口として地域における実習が始まることです。1年次前期は、年輪ピックと保育所での実習、後期には23市町村の個人宅に2泊する地域でのふれあい実習があります。領域別実習は2年次後期からスタートし、その最初にあたる基礎看護学実習Ⅱ(3単位)は病院で行われます。3年次の後期から小児・成人・母性・老年・精神看護学実習が各3単位、4年次には、地域看護学実習、専門実習へと続きます。地域から入り、地域に還る構造は、本学の建学精神に基づいて構築されています。

2. 領域別実習出陣式

実習前教育としてのオリエンテーションの一環として「継燈式」を実施しました。これは、本学の学生による領域別実習出陣式のようなものです。「ユニフォームを着て実習に行こう」「看護の実践をしよう」という構えを自らにつくるセレモニーです。式は、学生がネーミングし、主体的企画のもとに、平成15年10月1日に実施しました。5名の実行委員は式の意味やネーミング、実施に至る準備をしてきました。誓いの言葉、式の実際、予算案作成、実習部会担当教員と事務局との話し合い、マスコミ関係へのお知らせと、頑張ってきました。

自分たちが目指す看護を描き、実習施設の方々やこれまでお世話になった方々、保護者の皆様、在校生の前に高らかに誓い、心に看護の燈を灯し、「継燈式」は終了しました。「セレモニー」を実施できたことの感動を憶えている実行委員長は「頑張ってきてよかった」と括りました。

3. そして基礎看護学実習Ⅱ

10月14日から11月7日を前後に分かれて、県立中央病院で実習が行われました。「実習は面白い」と感じ取り、いきいきした実習で目標は達成できたと担当教員は報告しました。多くの学生は、この実習によって、看護への興味・関心が深まったという感想を述べ、一方で、知識の習得の少なさや、学習の必要性が実感できたと、頼もしい成長をいきいきした表情から発しています。臨床側の指導者からも「学生が患者さんの役に立ちたいと思っている気持ちが沸々と伝わる実習でした」というご意見をいただいたのです。教員の一人として、「我が新潟看護学生が地域の宝」としての成長に関わることは誇りです。



第1回 継燈式



継燈式実行委員(第2学年)

阿部 祐士・飯嶋 尚徳
木村 恵里・園田 理奈
星 揚子

それぞれの思いを胸に!

去る10月1日、私たち2学年は「継燈式」というセレモニーを、晴れて挙行することができました。この「継燈式」は、実行委員会が中心となり、今年の春先から企画してきたものです。学生の間では、入学当初から臨地実習を迎えるに当たり、区切りとしてのセレモニーを行いたいとの声が多数ありました。そのようなこともあり、今回実行委員会を発足させ「継燈式」の挙行に至ったわけです。

実行委員会では当初、どのような目的の、そして、どのような形のセレモニーを行ったらよいか苦悩に苦悩を重ねました。本学の1期生ということもあり、初めての試みだったので、今後このセレモニーが後輩たちへ受け継がれていって欲しいという願いもありました。「継燈式」というネーミングから目的に至るまで学生皆で検討を重ね、少しずつ前進して行くことができました。式の形態はシンプルながらも、一つひとつの動作や炎にはしっかり意味を込めました。このような過程により、「継燈式」が挙行されたのです。

ひとつの燈から灯されたキャンドルの燈を皆で共有できたことは、それぞれが看護に携っていく者としての自覚を持ち、看護学生として新たな決意を持つことができた証だと思えます。この「継燈式」によって学生それぞれが何かを感じ取り、看護の道への志を高く抱くことができたのではないかと思います。あの同じ空間で体験した幻想的な世界の中で、学生一人ひとりの胸に、しっかり「看護の燈」は灯されたと思えます。

最後に、実行委員会として立派に挙行された「継燈式」に携わせて頂き、メンバー一人ひとり、苦勞もあり喜びもありと、とても貴重な体験をさせて頂きました。学生のみならず、ありがとうございました。



継燈式

基礎看護学実習Ⅱを終えて



実践基礎看護学講座
助教授

堀 良子

基礎看護学実習Ⅱを終えて

10月から11月中旬にかけての6週間、2年生は基礎看護学実習Ⅱを行いました。1週間の事前学習の後、県立中央病院で93名が2週間ずつ前半・後半グループに分かれ、受け持ち患者の生活援助を中心とした看護を計画・実施し、さらに事後学習で体験の意味を共有する学習を行いました。

今回は学生にとってはもちろんのこと、看護大学としても初めての病院実習でした。学生は最初は不安と緊張でいっぱいです。患者さんや看護師さんたちに受け入れてもらえるか、自分の技術は通用するかなど気になります。実習の中では大なり小なり自分の無力さやどう援助してよいかわからないなど悩みもかかえますが、臨床指導者や看護師さん達、グループの学生同士、教員と相談しながら解決策を探りました。臨地という生きた現実に身を投じた学習の充実、面白さや手ごたえに「実習は楽しい」と多くの学生が話し、アンケートでも85%の学生は満足感があると答えていました。欠席や遅刻もほとんどなく、学生は臨地実習の社会性をよく認識し、責任感をもって実習を遂行したと考えています。内容の濃い多くの学びを与えてくれた患者さんや関係者の皆様に深く感謝いたします。

●病院実習を終えて

第2学年 高橋 妙実

初めての病院実習を終えて、私が一番感じたことは人に喜んでもらうことの嬉しさである。足浴や洗髪などの援助を行ったときに、患者さんは「ありがとう」「気持ちよかった」などと言ってくださり、とても喜んでくださった。実習生として、こちらのほうがお願いして援助させていただいているにもかかわらず、喜んでくださり、とても嬉しかった。自分のしたこと、相手が喜んでくれて、またそれが自分の喜びに繋がるという、とてもよい体験をすることができた。また、援助の技術について、実際の現場と学校での演習では大きく違いがあるということを知ることができた。実際の現場では、演習で習った基本を元に、手元にある物品を工夫して使用し、患者さんの状態にあわせて臨機応変に対応しなければならない。必ず基本の方法や順番どおりに援助行為ができるわけではないが、患者さんの「安心・安全・安楽」を第一に考えて基本を応用していくことが大切だとわかった。2週間という短い期間だったが、実際に看護の仕事の一部を体験してみて、看護職の大変さや難しさ、やりがいや喜びを知ることができ、大変有意義な実習であったと思う。

●そばにいたこと

第2学年 仙坂 あゆみ

実習で得たもの。それは「そばにいたこと」の大切さである。そばにいたことで解決された問題があった。そばにいたことで患者さんのことを「病氣の人」から「自分の日々を生きている人」と見ることが出来るようになった。

座学では「看護は患者さんと共に作り出すもの」とあったが、その言葉の意味がピンとこなかった。しかしとある日、受け持ちの患者さんのもとへ行くと、「お腹が痛い」と訴えていた。初めは私の手で患者さんの腹部を擦ったが、「痛い」の訴えは変わらず。力加減があわなかったのであろうか。次に暖かいタオルを患者さんに持って行き渡すと、患者さんは自身の腹部にそれを当てた。しばらくしてみると「大分よくなりました」と。

そのときに初めて実感した。自分だけではなく、患者さんと協力して患者さん自身の安楽を作っていくことを。そして患者さんとともに作り出す看護は、患者さんのそばに行くことで、初めて可能となるものであることを。

このときの「ありがとう。」の言葉は、ずっと忘れることはないであろう。

この実習を経ても、将来の自分の職業人像が確定したわけではない。まだ模索中である。しかし、これだけは言える。そばにいた人に、私はなりたい。



病院実習でお世話になった新潟県立中央病院

ふれあい実習を終えて

2年目の「ふれあい実習」を終えて ● ● ●

平成15年度のふれあい実習(第1学年、2期生)が、10月21日～23日と28日～30日にわたり、県内24市町村で行われました。その内6市町村は、昨年に引き続き連続で引き受けてくださった市町村です。そして、今年も新たに引き受けてくださったいくつかのホームステイ先の御家族から、来年もまたどうぞといううれしいお言葉をいただきました。

この実習は、地域で暮らしてゆく"生活者"としての人間と健康を、外から傍観者として観察するのではなく、その暮らしの場の内側から、体験的に感じとり考えてゆく実習です。ですから2泊3日というわずかの期間ですが"内"に入れてもらえる実習環境が重要な意味を持っています。

こうした、実習環境の準備は、臨地実習に先立ち、市町村の実習担当者の方々が、良い実習ができそうなホームステイ先を選び、受入を打診し、学生が参加し交流ができる住民の生活の活動場面を、担当教員との打ち合わせの中で提案し、関係者の了解を得るという手間のかかる協力の上に成り立っています。そして、ほとんどの学生が共通して、ホームステイ先の御家族の温かさに感激し(つまり温かいケアを受けたという経験)、地域の人々の気持ちを感じながら自然環境を含めた生活をj考えて実習から帰ってきます。こうしたことから、この実習では、県内の市町村の方々に学生が育てられていると強く感じています。



基礎看護学講座
助教授

中川 泉

●ふれあい実習を終えてみて

第1学年 大竹 和仁

この実習を体験して、人とふれあうことの難しさ、喜びを感じ、参加させて頂いた「ほのぼの機能訓練」では、引きこもり老人の苦悩、そして、保健師さんの老人への気配り、ホームステイ先では老人の一人暮らし実態、障害者の作業所を訪ねて気づいた私の障害者に対する偏見など、多くのことを気づかせてくれた実習になりました。

青海町でお世話になった方々のおかげで、素晴らしい実習体験ができました。私は、この実習を無駄にしないようにこれからの勉学、人生にこの経験を生かしたいです。



温泉いっぱい松之山町で



手作り夕飯「いただきます」

●ふれあい実習を終えて

第1学年 佐藤 泰宏

この実習で私にとって学習になったのは、人々の生活の場へ少しでも踏み込ませてもらう難しさ、年や性別、経験の違う人々とふれあうことによる刺激的な体験などです。そして、人の優しさに多くふれ、感動するとともに、私たちが人に優しくする必要があることがわかりました。さらに、その時はまだ臨地実習を行う前の段階でしたが、ふれあい実習後の教授とともにに行った報告書作成段階で得たものは、臨地実習以上に多くのことに気づかされたことです。また、このふれあい実習で分かったこと、分からなかったこと、感じられたこと、感じられなかったことがこれから明らかになってくると思います。それをこれからの学びの中で一つ一つ気づいていきたいです。

●ふれあい実習で学んだこと

第1学年 石川 めぐみ

私はふれあい実習で松之山町にお世話になりました。松之山町は、新潟県の南西部に位置している人口約3000人の町で、町全体が顔見知りという感じで、町の温かい雰囲気を感じることができました。

一日目は、「しづみの家」という心身障害者の作業所にお邪魔させていただきました。一緒に稲の穂を使った正月用のしめ飾りの一部を作る作業をしたのですが、皆さんとても親切に教えてくださり、また自然に接してくれました。ここで私の障害者との間に知らず知らずのうちに作っていた壁を壊すことができたような気がしました。

二日目はホームステイ先の人に話を聞かせていただいたり、松之山の水梨集落を案内していただいたりしました。毎年多くの雪が降り、山道が多く、一見不便に見えるのですが、それだけでなく工夫次第で豊かな生活ができるのだと思いました。

最終日は、「いきがいデイ」というデイサービスに参加させていただきました。一緒に革の財布を作ったり、お昼ご飯を食べたりとお年寄りの皆さんと交流することができ、とても有意義な時間を過ごすことができました。

この実習で松之山町の人たちの温かさに触れ、普段の生活ではなかなか学ぶことのできないことを学ぶことができ、得るものが多くあった実習になったと思いました。今回学んだことをこれから生かしていきたいです。



University of San Diegoを視察して 看護基盤科学講座 教授 吉山 直樹

2003年3月14日～21日の間、本学の国際交流の場の確保、いわば姉妹校提携の可能性のある大学として、カリフォルニア州サンディエゴにあるUniversity of San Diego (USD)を見学してきました。

わが大学は4年制看護大学として目下鋭意整備を進めておりますが、研究や教育の分野におけるグローバルな共同作業の場の構築に着手する時期にある、との中島学長の考えを受けた模索の見学旅行です。

USDは、およそ50年前に設立されていますが、その中に看護学部であるHahn School of Nursing and Health Scienceの前身が発足したのは、ちょうど30年前の1973年です。博士課程までを有する看護学部としては、カリフォルニア州で三つ目ですから、全米においても新鋭の学部です。

大学は、当時札幌医科大学の野地有子教授(平成15年6月より本学に転任)にご案内頂きました。野地教授はUSDの客員教授であり、長らく同校で研究・教育活動を継続しておられ、同校の人員構成と機構を熟知されている方なので、「言語障害」をかかえる私には、とても助かりました。

私の訪問時は、新しい看護学部長の赴任前で、代理の方(Mary Jo Clarkさん)にお相手をして頂きました。



看護学部長代理のMary Jo Clarkさんと

施設をくまなくご案内頂きましたが、とてもpoliteかつfamiliarな方で、感激致しました。Hahn School of Nursing and Health Scienceは看護研究と教育に熱意を持って取り組んでおり、米国においては新進気鋭の施設として認知されていること、同校が外国教員・学生の留学・研修に対応した豊富なプログラムを用意していること、すでに同校には日本からの看護学生の短期研修受け入れ実績がある、などの説明を受けました。日本の留学・研修の教員・学生は野地教授からも指導を受けることが可能です。

サンディエゴは、米国西海岸のカリフォルニア州南部という位置にあり、距離的に日本から近いのみならず、歴史的に日系移住者が多く社会的・心理的障壁が低く、気候の面でもきわめて温暖であり治安も良いこと等、日本からの留学・研修には有利な条件が多い、と思われまます。

サンディエゴ市内には某医療チェーンによる「日本クリニック」が最近開設されており、見学・研修先として利用できるのみならず、留学・研修生の保健医療の面でも安心できます。医師は岡山大医学部卒業の金先生という方でしたが共通する医師の知人が何人もいて話がはずみました。働いていた看護師さんの一人は清里村出身の若い人でしたので、これまた驚きました。

この渡米旅行では、プライベートに私も30年ぶりに母の一番下の妹の長女(従妹)でKiyomi Schwarzerと会えて感動でした。



USDの看護学部外観

看護基盤科学講座

看護基盤科学は、下記のような構成と人員で成り立っています。

教授 吉山 直樹

人間科学	講師	徐 淑子	形態・機能学	教授	杉田 収
	講師	大友 康博		教授	中野 正春
	講師	渡辺 弘之		教授	関谷 伸一
情報科学	助教授	橋本 明浩	病理学／公衆衛生学	教授	吉山 直樹
	助教授	中村 博生		教授	野地 有子
	講師	山本 淳子			

この講座は、看護学の基礎をささえる位置にありますが、ご覧の通りの混成部隊で、かたや英語や社会学から、こなた臨床医学まで、多彩な人員構成となっており、それぞれ一人ひとりが一専門分野を持ち、その指向する方向はさまざまであります。

研究手法やフィールド一つをとっても単純には割り切れません。従って現状は、ゆるやかな連合体といった運営形態で物事が運ばれています。

今後、大学院を併設して研究体制を強化するためにも、この「大講座」の占める位置は重要になってくる、と考えられます。将来的には組織形態を「看護基盤科学研究科」のような名称のものに整備・収束し、研究活動も地域貢献を共通項としたプロジェクト方式を積み重ねて、よりの確な基盤科学の情報センターとしての機能を提供できれば、と個人的には思っております。

1 研究部会報告

看護交流センター 研究部会長 加固 正子

研究部会の活動目的は、新潟県内の特性に応じたヘルスケア・サービスに貢献できる地域課題研究、及びヘルスケア提供者のためのリソース・アーカイブ（資料庫）構築のために必要な研究を行うことです。研究の成果は関係する地域のサービス活動のための教材やリソースとして広く紹介していく計画であり、そのため県内の看護職員との共同による臨床研究を積極的に進めています。

平成14年度の地域課題研究には3つの分科会があり、(1) 豪雪地帯のヘルスケア・ニーズに基づく実践の優先度評価に関する開発研究、(2) 継続看護における連携システムの構築、(3) ヘルスケア提供者のためのリソース・アーカイブの構築に関する研究、と題して活発に研究活動が展開され、本年6月に研究報告書が刊行されました。

2 教育研修部会報告

看護交流センター 教育研修部会長 中村 博生

看護交流センターでは平成15年度の「生涯学習支援事業」として、「開学2周年記念講演会」、「一般公開講座」、「専門公開講座」を開催しました。開学2周年記念講演会では、日本看護協会会長講演の後、本学学長との対論が行われました。一般公開講座は「看護とジェンダー」「サクセスフル・エイジングへの挑戦」という2つの大テーマの下に各5個のサブテーマを設けて開講され、専門公開講座では「看護研究」「看護英会話」「看護情報処理」という内容の実践力向上を目指したテーマで開講されました。

開学2周年記念講演

平成15年度一般公開講座の開学2周年記念講演は、南裕子氏（兵庫県立看護大学学長、日本看護協会会長）をお招きし、7月26日に開催された。前半は南氏の講演、後半は南氏と本学学長との対論で構成され、両方とも「地域に根ざした看護の発展をめざして」というテーマで行われました。



南裕子氏と本学学長との対論

アンケート調査の結果から、講演の内容と対論について9割近くの方が、良かったと回答していました。具体的には、「まちの保健室」、「今後の看護の方向性」、「看護職の活躍の場」、「看護の役割、必要性などの再認識」、「訪問看護ステーション」、「ASL患者の呼吸管理」に関する反応が多く、他に「対論で参加者の生の意見が聞けたこと」、「視聴覚機器の効果」、「平易な言葉で分かりやすかった」、「意見を出せてよかった」、「元気が出た」など、「講演と対論」形式の良さも強調されていました。

今後も、今回の実施結果を参考にしながら、参加者から満足していただけるような講演を企画、運営していきたいと考えています。

一般公開講座「看護とジェンダー」の「こどもの虐待はなぜ起こる」を担当して

「子どもの虐待はなぜ起こるか」というテーマで講義内容を組み立てるに当たって、子どもの虐待についてジェンダーという光を当てて、家族や子育て環境の変遷を振り返りながら「母性神話」や「3歳児神話」の起こった背景や問題を考えていきました。過去に実施した育児不安についての調査結果も提示しましたが、そこでも今更ながら母親と父親の「子育ての悩み」の深刻さの違いに、母親たちの切実な胸のうちを感じ取ることができました。

看護職、教員、学生、主婦などと多様な22名の参加者を前に、具体的で分かりやすい内容となるように、統計データや理論枠組みを用いる際も、可能な限り、私自身の体験や実際に出会った事例と結び付けて解説することを心がけました。終了後は参加者から活発な質問や示唆に富む意見が出され、「子どもの虐待」「ジェンダー」について更なる研究と実践が求められていることを実感させていただきました。



地域看護学
講師

小林 恵子

平成15年11月30日、特別選抜入試が実施されました。

	推薦入試		社会人特別選抜
	一般	衛生看護科	
募集人数	28名	2名	若干名
受験者数(a)	48名	3名	6名
合格者数(b)	29名	2名	4名
合格倍率(a/b)	1.66	1.5	1.5

今後の一般選抜入試の日程は、以下のとおりです。

一般選抜入学試験(前期) 平成16年2月25日(水) 会場:新潟県立看護大学

一般選抜入学試験(後期) 平成16年3月12日(金) 会場:新潟県立看護大学

平成16年度
入学試験の概要

1.平成15年度 学長特別研究費

今年度は、共同研究10課題、個人研究15課題の計25課題の申請があり、いずれも採択されました。現在、各研究課題とも、1年間の成果のまとめに着手しております。採択課題、及び研究代表者は下記の通りです。

共同研究

研究代表者	研究課題
大久保明子	小児看護学におけるマルチメディア教材の開発～小児看護技術に関する教材
山本 淳子	異文化看護学(Trans-Cultural Nursing)の視点をとり入れた看護英語教材の開発
堀 良子	ドレイファスモデルを枠組みとした看護技術教育の構築と学習支援システムの開発
佐々木美佐子	大学での保健師教育における地域看護診断の教育方法の構築
富川 孝子	実習カンファレンスのあり方に関する研究
加藤 光貴	成人看護学演習におけるマルチメディア教材の開発
岡村 典子	看護を基盤に置きたいのちに関する諸問題の学際的な一考察
和田 佳子	看護学生の自己成長に関する研究
加城貴美子	助産師教育に生かす新潟県内の助産史調査
中村 博生	現代におけるヒューマニティと「環境」の関係について

個人研究

研究代表者	研究課題
山本 淳子	コンピュータを使った看護学生のための映画語学教育
岡村 典子	看護実践能力の育成からみた看護系大学における基礎看護技術教育の検討
堀 良子	ADL低下患者の気道感染予防を意図した口腔衛生状態の改善に関する研究
平澤 則子	在宅難病患者・家族の療養・介護経験における適応と看護援助の特質
井上みゆき	新生児看護の倫理～看護者が語る重症障害新生児の最善の利益
杉田 収	活性酸素を消去する身近な抗酸化物質の抗酸化能の比較
田中キミ子	一人暮らし高齢者の健康逸脱に関するセルフケア要因の研究
渡辺 弘之	ベトナムのハンセン病患者の処遇についての研究
小林 恵子	児童虐待援助における保健師の意志決定構造
西方 真弓	母体搬送となった妊産婦の搬送時から分娩までの身体的および心理的变化に関する研究
齋藤 智子	介護保険制度下のケアマネジメントにおける行政保健師の役割に関する研究
柏木 夕香	高齢者のがん告知に関する研究の動向と今後の課題
金井 幸子	看護師の視点からみた中学生の健康問題
俊成 晴奈	精神科入院患者の多飲水に対する指導とその効果の実態について
橋本 明浩	制約条件付きの非線形の近さの数値実験

2.セクハラ相談開始

セクシャルハラスメント相談窓口が開設されました。

今年度からセクシャルハラスメント対策委員会が創設され、学生、教職員及び関係する学外者に係るセクシャルハラスメントの相談及び救済のための窓口が開設されました。平成15年度の相談窓口兼相談員は、以下の教員4名、事務職員2名の計6名です。

なにかありましたら、どうぞ相談窓口を活用してください。相談の申し立てを行った方の要望に沿うよう、6名の相談員の中から、原則として2名の相談員が相談にあたります。

学内規程において、相談員には守秘義務が課せられています。関係者のプライバシー、名誉、その他人権を尊重するとともに、相談の過程で知りえた秘密を他に漏らすことは決してありません。なお相談の際には、直接相談員をお尋ねいただいても、電話をかけていただいてもかまいません。相談員電話番号の入手リーフレットは教務学生係にあります。

平成15年度相談窓口担当者兼相談員

教員	事務職員
中野 正春	本間 修
深澤佳代子	池亀 玲子
中村 博生	
飯吉 令枝	

3.臨地実習指導者養成講習会

平成15年度看護職員臨地実習指導者養成講習会の実施 基礎看護学講座 助教授 中川 泉

新潟県主催の上記講習会が、8月18日(月)から10月9日(木)の期間、土日を除く毎日、本学を会場に行われました。この講習会は看護の臨地実習に関わる現場の実習指導者の質の向上を目的に毎年新潟市で行われていましたが、今年からは会場を本学に移し、講習会の企画は本学看護系教授が担当し、運営は県福祉保健課看護介護人材係で、専任の教務事務担当者1名を大学内に常駐させるという新しい連携体制で行われました。受講者は、県内28病院と1健康福祉事務所からの40名(看護師38、保健師1、助産師1)。10月8日に日には謝恩会も開かれ、短い"学生生活"をしめくりました。今後の、臨床指導者としての活躍が期待されます。

4.FD研修会

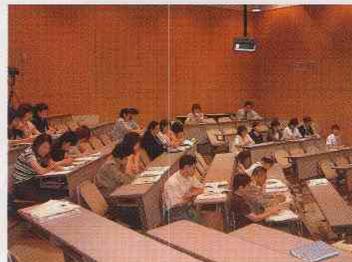
教育改善への取り組み

FD委員会 委員長 教授 関谷 伸一

平成15年度から、教員の教育能力増進のための特別委員会、FD (Faculty Development) 委員会という組織が本学に設けられました。Faculty (ファカルティ) という英語は、大学の学部、大学の教員をさす言葉であると同時に、能力とか才能という意味もあります。Development (ディヴェロプメント) は発達とか開発という意味の英語です。現在、日本の大学は教育・研究のみならず、大学運営・予算などあらゆる面において見直しが要求されています。なかでも教育方法、教員の教育能力について早急の自己点検・評価・開発が迫られており、そのために多くの大学でFD委員会や教育能力開発センターといった組織が設置されてきています。

本学においても例外ではなく、新しい看護教育について教員自らが学び、実践していかなければなりません。そこでFD委員会では先ず第1に、「学生による授業満足度調査」を開始しました。授業に対する満足度を学生にアンケート調査します。また要望などを自由記載してもらい、担当教員の授業改善に役立ててもらおうというわけです。第2番目の仕事は、教員を対象にした研修会を開催し、新しい教育プログラムを開発することです。今年の9月から5回研修会を実施しました。その中で、教員が一方向的に講義し学生はただ聞くだけという従来の教育方法を改め、学生主体の授業に改善していくための一歩として、PBL (Problem Based Learning) という「課題を基盤にした学習法」を検討してきました。

このように学生の声に真摯に耳を傾け、新たな教育方法や技術を学ぶことにより、教員の意識変革と実際の教育改善が行われてくるものと期待されます。

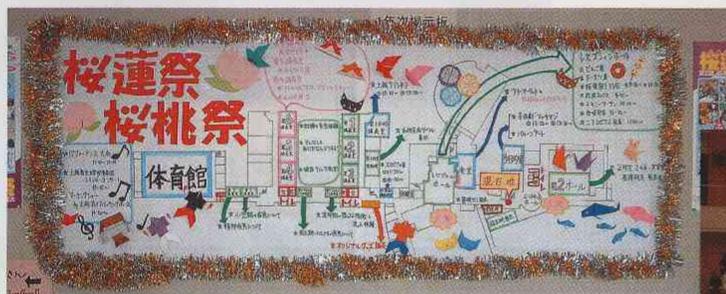


第1回研修会「チュートリアル教育について」



合宿研修会でのグループワーク

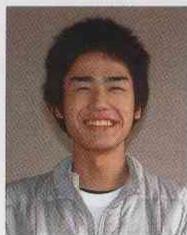
第2回 桜蓮祭 無事終了



元気いっぱいの
「よさこいソーラン」



学生活動



大学祭実行委員長
第2学年

小林 宏司

大仕事を終えて

2003年11月15日、看護短大の第10回桜桃祭と看護大学の第2回桜蓮祭開催にあたり、たくさんの人の協力のおかげでこの日を迎えることができました。

5月に役員が決まり、6月の初めから半年後の大学祭を目指し、2年生6人、1年生6人の計12人で構成された大学祭実行委員会は活動を始めました。苦労したことはたくさんありましたが、特にポスターとパンフレットの作成にはたくさんの協力を必要とし、非常に時間を要しました。その作成に携わってくれた人たちのおかげで今年もまた素晴らしいものを創ることができました。手作りということで折り込む作業もすべて学生の手で行いました。大学祭の準備に当たって残り一ヶ月というときに2年生は病棟実習がありました。この間、本当に実行委員会の団結力が試されたと思います。実行委員長である私がない間も残っている委員一人一人が責任を持って仕事をしてくれました。各企画、各担当者、学生みんなが大学祭という一つの目標に向かって、毎日放課後遅くまで残って準備を進めてきました。そういったみんなの協力のおかげで大学祭当日は、多くの一般来場者をお迎えすることができ、成功のうちにその幕を閉じることができました。

大学祭の企画に携わってくれた皆さん、本当にありがとうございました。また来年、次の大学祭実行委員会が素晴らしい大学祭を創ってくれることを期待して、私の役目を終わらせていただきます。ありがとうございました。



みんなで踊った「佐渡おけさ」



受付も楽しめないよ



子供劇「マッチマン」の大活躍にちびっ子たちもヤン!

エアロビクス研究会 吉田 舞子(第2学年)

私たちエアロビクス研究会は、毎週木曜日18:00から、体育館で活動しています。このサークルは今から7年前に看護短大で始まり、大学では2年目になります。普段の活動内容は、ウォーミングアップをし、ローインパクト、ハイインパクトのメニューを終えた後、筋トレ、ストレッチを兼ねたクールダウンを行います。クールダウンは、静かな曲を聴きながらやるので、リラックスできます。サークル員にはこれが一番人気です。今年度から、月に一度インストラクターの先生をお迎えして本格的に活動するようになりました。インストラクターの先生は、明るくパワフルで、サークル員一同、月に一度の先生の来校を楽しみにしています。

一年間のスケジュールは、まず4月に新入生へのサークル紹介、新入生歓迎会があります。今年はインストラクターの先生の勧めで大会に出場し、先輩たちが3位という好成績を修めました。7月末から8月はじめには強化練習をし、11月にある大学祭では毎年踊りを披露しています。大学祭にはOGの方も来られ、私たちのパフォーマンスを盛り上げて下さいます。この大学祭でのパフォーマンスが私たちにとって最大のイベントです。また、クリスマスの時期には普段の活動とは一味違った"楽しむエアロビ"をやっています。

一年を通して活動盛りだくさんなエアロビサークルですが、その分、先輩・後輩との交流も密で、楽しいサークルです。短大から大学へと移行しつつありますが、これから先も先輩たちの想いを引き継ぎ、このサークルを盛り上げていきたいと思います。



華やかなエアロビサークルの面々

編集後記

設立2年目の看護大学は、昨年にも増して多くの事業が企画され、それらを職員と学生が一丸となって実施してきました。それらの軌跡の一部を広報でたどってみました。各企画の直接の担当者は、反省も含め様々な思いがこみ上げてくるものと思います。忙しい中を、大変ご苦労様でした。

2年生は初めての病院実習を経験しました。継燈式という実習への出陣式で、いつになく緊張した彼らの顔つきは、一方で大学生活2年目という成長をも感じさせてくれました。大学祭での1年生の明るくはつらつとした表情は、これからの大学生活への希望に満ちていました。若さこそ原動力、看護大学も2歳の若さ、これからが伸び盛り、といきたいものです。

[広報委員会：関谷 伸一]



新潟県立看護大学
Niigata College of Nursing

広報委員会

〒943-0147 新潟県上越市新南町240番地
Tel 025-526-2811 Fax 025-526-2815
E-mail soumu@niigata-cn.ac.jp